

## <神々の真相 6>

これまでの一連の資料で「神々」やイエスの真相、降臨時期などについて検討し、真相を解く鍵はカッパーラとシュメールにあることが解った。特に重要なイエス=天照大神に関する象徴としては、以下のものが挙げられる。

- ・ 数字の“8”は大神アヌとニビル、ヤハウエ、イエス（救世主、ベツレヘムの星）の象徴である。アヌ及び「神々」の星ニビルの象徴としての八角形が変形され、“天”を象徴する記号と「神」を象徴する十字型になっている。つまり、これらの象徴図形は大神アヌとニビルの象徴であると同時に、シュメールの「神々」をも象徴している。特に八角形はアヌのお気に入りだったイナンナの象徴ともされ、彼女に因む金星も同じ象徴となる。日本では、イエスを原型とした聖徳太子縁の法隆寺の夢殿の八角形、八岐大蛇（草薙の剣=アロンの杖）などが関係する。
- ・ イエスの象徴は“輝く明けの明星=金星”であり、イナンナの象徴と同じであるが、これは木に掛けられて“死んだ”後、“復活”したイナンナが原型だからである。
- ・ 知恵の象徴は五芒星で“ソロモンの星”であるが、大工の神として聖徳太子が祀られている広隆寺では、聖徳太子の象徴として五芒星が描かれている。
- ・ イエスは 12 人の使徒と共に描かれ、“13”も救世主的象徴である。（「闇」の連中は不吉な数字として悪用している。）
- ・ 降臨の時期は世界情勢、マヤ暦、各神社の動向と式年遷宮の時期などから、2012~2013 年と推定される。  
2012 年は三百人委員会=サタンの僕の世界統一政府樹立予定であり、その時期以降こそ救世主降臨に相応しい。  
マヤ暦では 2012 年の冬至が“現在の時代の終焉”となっているが、この暦は偉大なる科学者ニンギシュジツダによって作製され、太陽活動に連動しており、将来太陽系に発生する大規模な変動を予測している。過去を振り返れば、印はいつも天に、特に太陽活動に現れていた。  
また 2012 年は辰年、2013 年は巳年で、どちらも蛇に関係する。特に、2013 年の巳は癸巳であり、“癸”とは水の弟、水である弟、のことで、水に関わるシュメールの「神」エンキを象徴する。そして、“癸”に絶対三神が「合わせ鏡」となっている草冠=艸を付けると“葵”となり、葵祭りが示すように“復活”の象徴である。そして、天照大神は蛇神だから、癸巳の年ほど天照大神=イエスの“復活”に相応しい年は無い。

このように、すべてが収束している 2012 年から 2013 年に掛けてこそ、新た

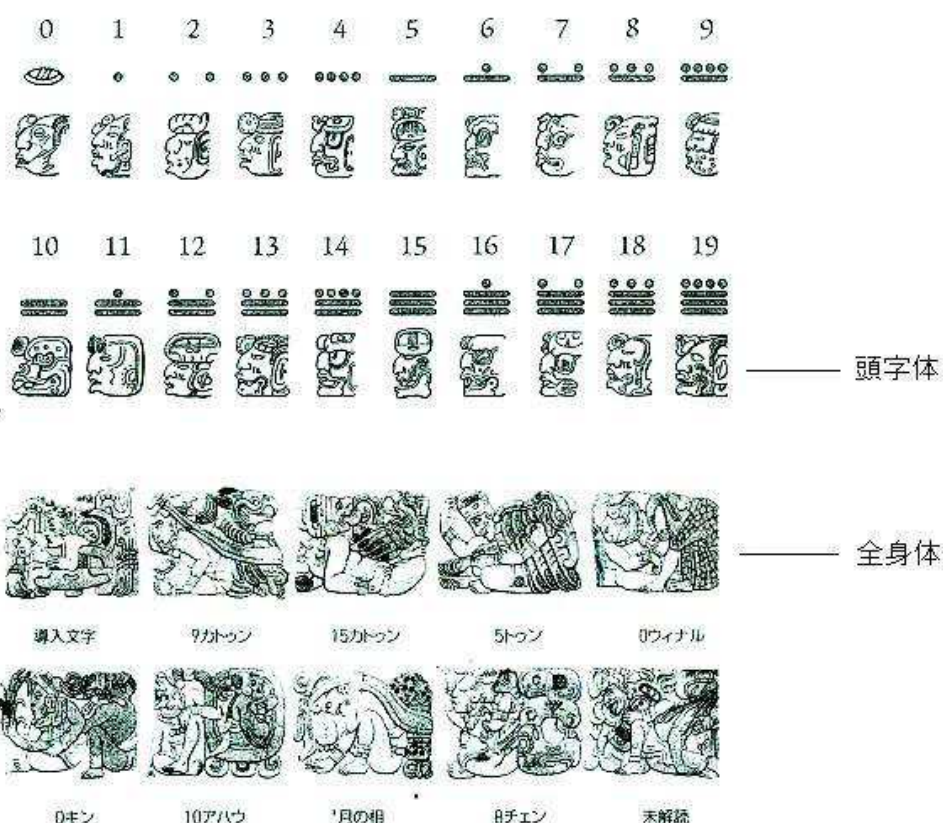
な時代の幕開けに相応しい“時”は無い。それを端的に示しているのがマヤ暦である。ならば、そこにこそ救世主の象徴たる“8”や“13”、秘密を解くための知恵の象徴たる“5”の真意が隠されているはずである。何と云っても、マヤ暦を作製した知恵の「神」ニンギシュジツダの“知恵”が隠されているはずである。

これまではあくまでもカッパーラの象徴数字としての扱いであったが、その裏にある真意については解っていなかった。しかし、2009年4月20日に発行された「古代マヤの暦」(ジェフ・ストレイ著、創元社)にこれらの真意が記されていたので紹介する。

### (1) マヤの計数システムとツオルキン、長期暦

マヤの計数システムはこれまでの資料で示したように20進法であり、太陽神ウツの象徴数字20を使ってニンギシュジツダが始めた。

一部例外はあるものの、マヤのシステムでは下から上に向かって20倍に増えていき、読む時は上から下に読む。数字の表記法としては3タイプあり、点と棒による方法(点が1で棒が5)、それより頻度の低い頭字体、更に頻度の低い全身体がある。



太陽神の象徴“20”と救世主の象徴“13”を掛け合わせた日数 260 日を、マヤでは儀式と預言を司る最も重要な暦の単位としてツオルキンと言う。日には次に示すように、1 つずつ名前が付けられている。1 イミシュ→2 イク→3 アクバル…というように進んでいく。



マヤ暦には様々な周期が存在する。

- 7 日：大地の神の周期。神の数字 7。
- 9 日：夜の王。3×3 の三神三界。
- 13 日：天界の神の周期。救世主は天界にいるということ。
- 20 日：ウィナル。太陽神ウツ。
- 260 日：ツオルキン。13×20＝救世主×太陽神。
- 360 日：トゥン。2×9×20。
- 364 日：計算年。
- 365 日：ハーブ。
- 18980 日（52 年）：カレンダー・ラウンド。52×365、73×260。
- 7200 日：カトゥン。20×360。
- 144000 日：バクトゥン。20×7200、20×20×360。選ばれし 14 万 4 千人。
- 5125 年：13×144000＝救世主×選ばれし 14 万 4 千人！
- 25626 年：5×5125＝知恵×救世主×選ばれし 14 万 4 千人！地球の歳差運動。

太陽年の 1 年である 365 日が定義されているのに、364 日も存在するのはおかしいように思われる。しかし、“364”という数字は実は興味深い。それは、チチェン・イツァーにあるククルカンのピラミッドである。このピラミッドは四方に 91 段ずつ階段があるジグラットであり、合計 364 段で計算年の日数と一致する。そして、頂上のプラットフォームを加えて 365 となり、1 ハーブ＝1 太陽年となる。また、91＝7×13＝神の数字×救世主の数字（どちらも素数）であり、更に、1～13 までの和でもある。

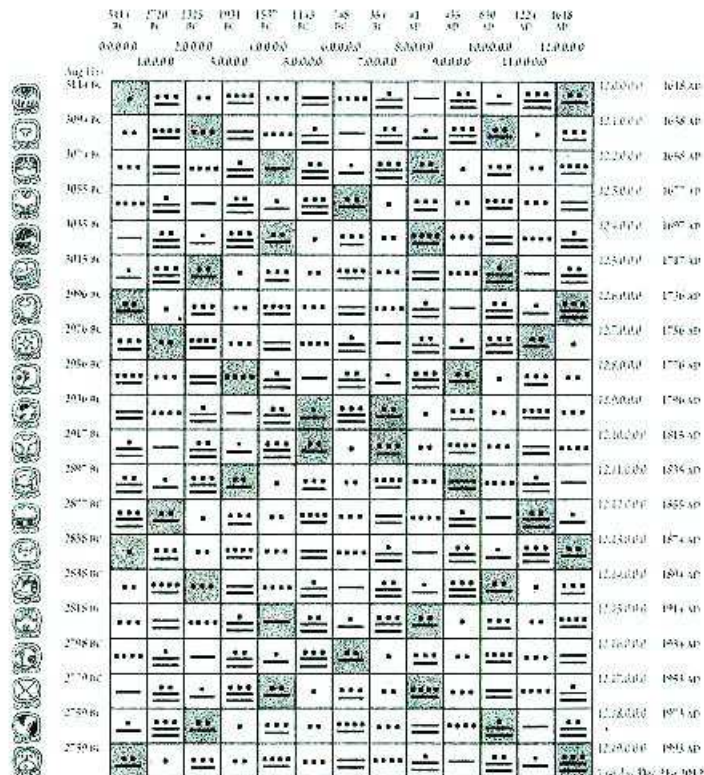
トランプも、1～13 の数字の組が 4 組ということは、和 91 が 4 組と見なせ、それにジョーカーの 1 枚を加えて、カッパーラのこのピラミッドと同じ構造と見なせる。このように、トランプはカッパーラの要素＝魔術的要素を有するので、占いなどに使われるのである。つまり、そのカッパーラの創始者は、ニンギシュジツダと言える。

さて、中でも特に長期暦と呼ばれているものがあり、それは次の周期である。

- 20 キン=1 ウィナル。(20 日)
- 18 ウィナル=1 トウン。(360 日)
- 20 トウン=1 カトウン。(7200 日)
- 20 カトウン=1 バクトウン。(144000 日)
- 13 バクトウン=1 時代。(187 万 2 千日=5125 年)
- 13 バクトウン 5 巡で 26000 年。

太陽神の象徴“20”と救世主の象徴“13”が係数となっている。1 トウンのみ 1 ウィナルの 18 倍だが、神宮地下殿扉には、何故か 18 紋の菊の御紋があるという。それは、この係数 18 に関係しているのかもしれない。

閑話休題。マヤ暦の基本構造は、5125 年の長期暦と 260 日暦のツオルキンを合わせたものである。それを図に示す。升目 1 つが 1 カトウン、縦の 1 列で 1 バクトウンになる。左端のマヤ文字と升目の数字（点が 1 で棒が 5）で 260 日暦が表示される。中央の 13 と 1 を中心として任意に上下左右対称の長方形を描くと、その四隅の升目の和は常に 28 となる。四隅のどこかに 1（最小数）、13（最大数）、7（1 と 13 の平均）を含むグループの升目に網を掛けると、二重螺旋のようになる。





これはまさに DNA の二重螺旋であり、DNA はニンギシュジツダが操作した。つまり、このような仕掛けにより、誰が壮大な暦を作製したのか暗示しているのである。

13 バクトゥンの始点をグレゴリオ暦で換算すると、BC3114 年になるという。シュメールでは、地球年は BC3760 年から始まったことになっているから、ほぼそれと同時期であり、矛盾しない。

また、長期暦の終了日は 2012 年 12 月 21 日である。この日（正確には 1998 年を中心として 1980～2016 年の 36 年間）は、天の川に帯状に伸びる暗い部分（マヤ語でシバルバー・ベ、「地下世界への暗い道」の意）と太陽が直列する。また、ワニもしくはジャガー（ヒキガエル）の口の中で、太陽が再生すると信じられており、次代の創世の日でもある。マヤ暦では、現在は 4 アハウのカトゥンであるが、「チラム・バラムの書」によると、この時代にククルカンという神が帰還するという。また、知識を記憶し、それを年代記の中に要約するカトゥンとされている。

太陽の再生、ククルカンの帰還というのは、まさに救世主の降臨である。そして、これまでの知識を記憶して年代記の中に要約し、新たなる時代への道標とするカトゥンなのである。“年代記”というのも、シュメールに基づいている。

ここでは、ニンギシュジツダがククルカンとされている。つまり、ニンギシュジツダ＝ククルカン＝ケツァルコアトルである。前述のチチェン・イツァーにあるククルカンのピラミッドのカッパーラは、まさしくニンギシュジツダのカッパーラに他ならない。ただし、実際にニンギシュジツダが帰還するのか、イエスが降臨するのか、それは「神」のみぞ知る。

## (2) 金星に隠された秘密

マヤ人にとって金星はノフ・エク（偉大な星）またはシュシュ・エク（気難しい星）であった。金星はイエスとイナンナの象徴だから、偉大な星はイエス、気難しい星はイナンナに因むものである。金星を表すマヤ文字は、くねくねした形に目玉の付いた形で、時には十字の星形のこともあった。十字の星形など、十字架を象徴とするイエスの象徴そのものであるし、ニビルの象徴でもある。



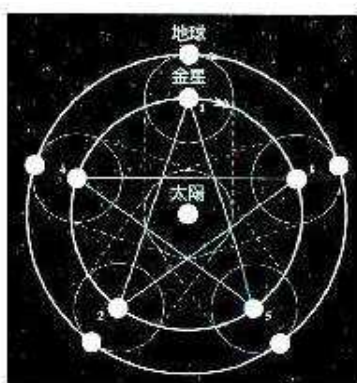
閏年の無いハープに暦の単位としての意味を与えたのは、金星の動きである。地球、惑星、太陽が一直線に並ぶ現象を合（ごう）と言い、1つの合から次の合までの平均的長さ（周期）を会合周期と言う。金星の会合周期は 583.92 日で、マヤでは 584 日としていた。地球と金星の関係では、合は 8 年間に 5 回繰り返される。会合周期の 5 回分に相当する 2920 日（584×5）は 8 ハーブ（8×365＝

2920) であり、ほぼ 13 金星年 ( $13 \times 224.7 = 2921.1$ ) であり、99 月期にも近い。

カレンダー・ラウンドが 2 巡りすると (104 ハーブ = 146 ツオルキン)、65 金星周期、すなわち、金星が描く五芒星が 13 回起こったことになる。そのため、この期間は金星ラウンドと呼ばれている。そして、この時期に暦の微調整が行われていた。

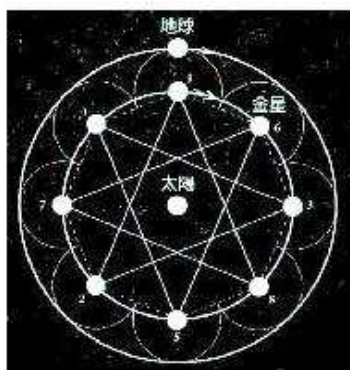
#### ・金星の描く五芒星

合には内合 (地球-金星-太陽) と外合 (地球-太陽-金星) があるが、ここでは内合を考える。金星の内合は 584 日毎に起こり、8 年間で 5 回起きる。つまり、1 回につき地球年で  $8/5$  年ということである。だから、地球の公転軌道を 5 等分すると、内合の位置は軌道上で  $8/5$  周ずつずれていくことになる。それを順に結ぶと五芒星の形になる。(数字が小さくて見にくいですが、図で結んだように描かれる。一番上が 1 回目、左下が 2 回目である。)



#### ・金星の描く八芒星

一般的には観測により会合周期を調べ、ケプラーの法則に従って公転周期を計算する。金星の公転周期は 224.7 日である。公転周期から、地球が太陽を 8 周する間に金星は 13 周するから ( $8 \times 365 \div 13 \times 225 \div 2920$ )、地球が 1 周した時には、金星は  $13/8$  周 =  $(1 + 5/8)$  周進んだ位置になる。よって、地球の特定の日の金星の位置を 8 年分繋げると、軌道上に八芒星が描かれる。



つまり、地球の8年は金星の13年に相当し、会合周期を結んでいくと軌道上に五芒星が形成され、地球と金星の公転の位置関係を結んでいくと八芒星が形成されるのである。金星は元々イナンナの象徴で、イナンナが“冥界”で木に掛けられて“死んだ”後、“復活”したことがイエスの原型であった。それ故、明けの明星はイエスの象徴でもある。だから、“8”と“13”は救世主の象徴となった！また、「生命の樹」に於ける中心セフィラ、ティファレトは8本のパスが出ているが、ティファレトは“美”であり、美の女神イナンナの象徴に相応しい。そして、これらの謎を解く鍵こそ、壮大な天体現象まで理解する“知恵”であり、それが救世主に関わる金星と地球の会合周期の関係から描かれる五芒星として象徴されるようになったのである！

なお、神宮の暦には、金星の動きが事細かに記されている。これは、天照大神＝イエスの象徴が金星ということだけではなく、金星にはこのような秘密の知恵が隠されているためだろう。

### (3) ニンギシュジツダが関わったその他の暦

ニンギシュジツダが関わった他の有名な暦として、アステカの太陽の石とストーンヘンジがあるので、それらを紹介する。

#### ・アステカの太陽の石

直径 366cm、厚さ 61cm、重さ 24t の石である。アステカの暦はトルテカから伝わったと言われている。中央パネルの周りを 20 個の名前の文字が囲んでいるが、マヤの日の文字とは異なる。第 5 の、そして最後の太陽を司る太陽神はトナティウと言われている。



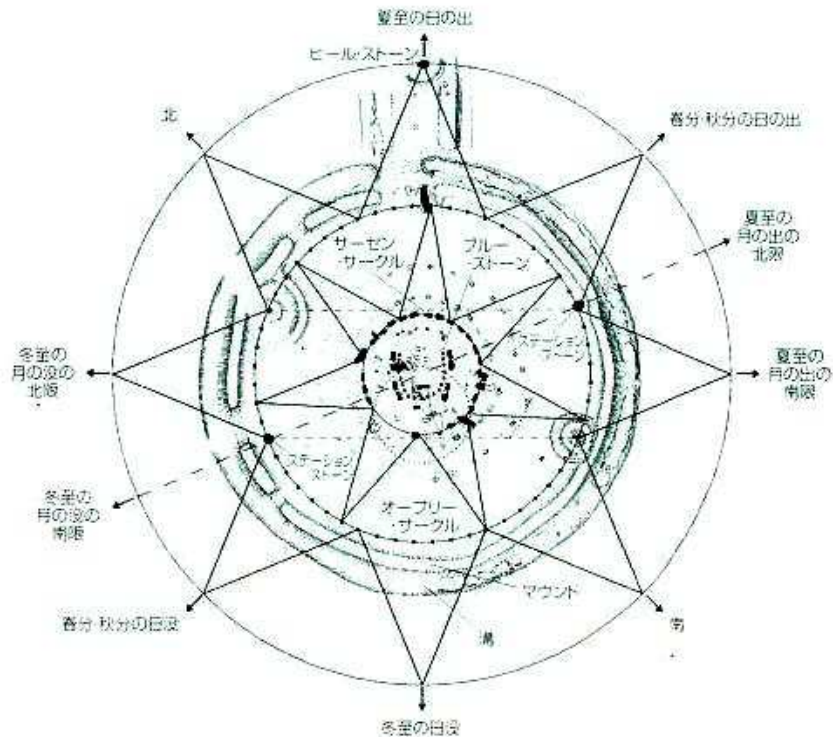
見にくいですが、図にアルファベットが記してある。それらは、以下の意味である。特に、一番上にある“13の葦”や宇宙蛇という象徴は、救世主やニンギシュジツダを象徴しており、興味深い。

- A: トナティウ (太陽神)、B: 20日の月18個 (見えているのは2個のみ)、C: 過去の4つの時代、D: 日の文字20個、E: 蝕の目印56個、F: 羽根104枚、カレンダー・ラウンド2回分、金星ラウンド1回分、G: 太陽光線の絵8個、H: 96歯、満月13回分の日数の1/4、I: 13の葦、J: 蛇の図26個、K: 宇宙蛇の口の中の闇の光、光の神。

• ストーンヘンジ

言わずと知れた、ピラミッドに並ぶ有名な巨石遺跡。ロンドンから西に約200kmのソールズベリーから北西約13kmに位置する環状列石である。

このストーンヘンジに限らず、世界中の巨石遺跡は<神々の真相1>で記したように、ニンギシュジツダが考案し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝った。それは、マルドゥクがラーとしてあらゆる「神々」の上に自分を君臨させ、彼らの力と属性を、勝手に我が物のように語ったが、まだそのような時代ではないことを人々に知らせるために、空の観測の仕方を教える目的で建造された。各「神々」には星座が割り当てられており、エンリルは牡牛座、マルドゥクは牡羊座だったが、マルドゥクが支配権を主張したのは、太陽がまだ牡牛座の位置=エンリルの時代にあることを示していたのである。





ストーンヘンジ本体は、外側のサーセン・ストーン 29 個半が月期の日数 (29.5 日)、内側のブルストーン 19 個が太陽年を示している。19 太陽年=235 月期はメトン周期と呼ばれ、BC432 年に特徴的な周期として発見したギリシャの天文学者メトンに因んで名付けられた。19 年前と同じ日付に同じ月の相が見られるので、太陽と月の周期を調和させるのに役立った。

北と南、夏至と冬至、春分・秋分の日の出・日の入り、月の出・月の入りを組み合わせ、象徴的な八芒星が描かれる。この 8 個の位置が、56 個のオーブリー・ホールを取り囲んでいる。オーブリー・ホールは日蝕の予測に使われ、七芒星としてストーンヘンジ本体を取り囲んでいる。

構造としては、一見すると石の柱の上に横石が乗っているだけで、地震で崩れてしまいそうである。しかし、木造建築と同じほぞ組の工法が使われており、崩れたりすることは無い。ならば、宮大工に代表される日本の伝統的建築工法の基礎も、ニンギシュジツダが教えたということである！

その証拠に、大工の神様として崇められる聖徳太子は、広隆寺でニンギシュジツダの“知恵”の象徴である五芒星として象徴されている。

このように、やはりニンギシュジツダは偉大なる知恵の「神」だった。そして、一連の「神々の真相」で記した内容と矛盾しないどころか、ますます信憑性が高くなった。そうすると、ニンギシュジツダが残したマヤ暦が示す現在の時代の終わり、すなわち 2012 年の冬至が一区切りであり、そこから新たな時代が始まると認識しなければならない。

参考著書：

・ジェフ・ストレイ著、「古代マヤの暦」、創元社。

初版：2009 年 8 月

改定：2012 年 12 月